

昭和60年度

長久手の郷土芸術

長久手町郷土史研究会



長久手の郷土芸術

郷土史研究会第二部会

浅井 鹿雄

伊藤 高義

加藤 明子

近藤 良晃（表紙題字）

寺島 初美

水野 秋金

与語 藤一

石崎 義雄



獅子頭

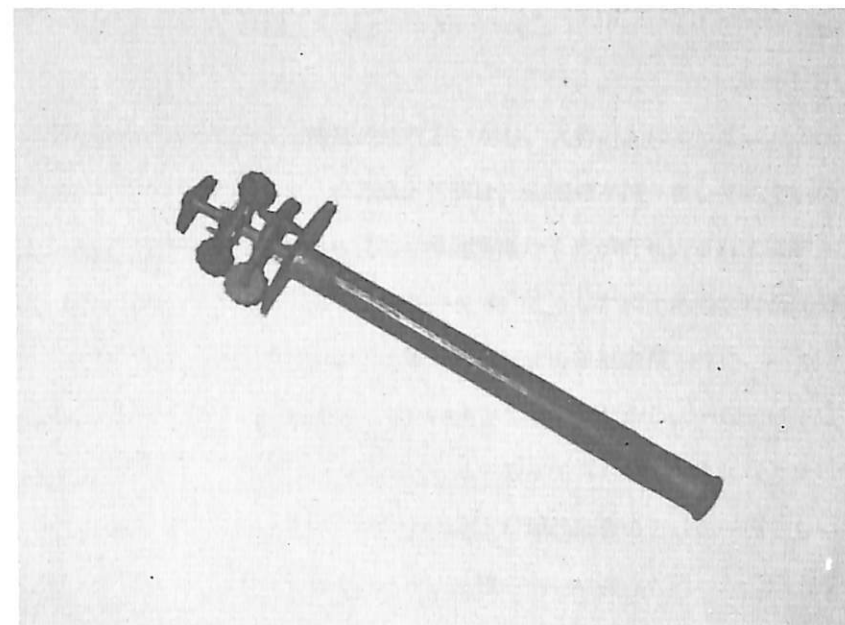
北熊・宗延寺蔵

- 製作年 不 明
- 大きさ

高さ	28 cm
横 幅	30 cm
縦	23 cm
- 各 部

まゆ	15 cm、目 9 cm、鼻横 14 cm
高さ	6 cm、耳 12 cm、口幅 22 cm
- 重 さ 900 g (胴衣を含む)
- 胴 衣

前約	70 cm、後 130 cm
後づけ紐	62 cm



獅子舞の鈴

北熊・福岡あや氏 蔵

- 製作年 不 明
- 大きさ

全長	26.8 cm	
上 部(真ちゅう)	7.8 cm	
中 部(木の棒)	15.2 cm	径 約 2 cm
下 部(真ちゅう)	3.8 cm	径 約 2 cm
- 重 さ 150 g

上部金具 4段。第1段は皿状の0.7 cmのものと菊形の径3 cmの2枚重ね。第2段は径4.2 cmの丸輪を約0.6 cm幅の十字に組み合わせたものに、輪の4ヶ所に約2 cmの花形のものを通し、音の出るようにしてある。第3段は同じ作りで少し大きい。第4段は菊形の1枚もの、径6 cm。

は じ め に

ふる里に伝わる郷土芸能は、地域の特色をいかし、大勢の人によって、この伝統の灯が守り続けられています。この郷土芸能は、全国津々浦々に、それぞれの地域性、気候、風土、習慣、生活様式など多種多様なものが折り込まれて構築され、長い伝統を誇って今日まで継承されています。こうした郷土色豊かな伝統芸能も社会環境の著しい進捗や市民生活の変革などにより後継者難も伴い、一つ一つ姿を消して行くのは、全く残念なことといえましょう。しかし、一部地域では伝統の灯を再興させようと努力しているところも数多くみられるようになりました。これも時代の波とともに「移り変わりの激しい現代社会の姿」の一面ともいえましょう。こうした折、長久手町内の先人たちが郷土に育んだ幾つかの郷土芸能について掘り起こし再考してみました。

郷土芸の多くは、歴史的にみても、神と人との交歓を具象的に表現した各種の祭りに端を発したといっても過言ではないでしょう。かつて昔は、地域周辺や村単位に活動していたため、これらの生活共同体の中で五穀豊穡、疫病・災難の追放、子孫繁栄などの祈願から祭りに発展、その一部分を、素朴な生活の中の風俗、習慣を歌や踊りとして舞われ狂言なども入れて芝居化したものといえましょう。特にこの地方は、享保年間（1716 - 1736）には七代藩主・徳川宗春が自由放任主義的な政治を行い、芝居興行を盛んにしたため「名古屋は芸どころ」として芽ばえ、芸熱心に伝統の灯が守り続けられ、発展したといえましょう。その名古屋に隣接する長久手の人たちも芸ごとには熱心で、明治、大正から昭和初期までは、各地で数多くの芸能が盛んに行われていました。

「人生は芝居の如し」と福沢諭吉の言葉にあるように、人の一生には喜怒哀楽

が伴い、人それぞれによる起伏も異なり、その困苦を乗り越え、幸せ求める努力が人生といえましょう。現代社会のように複雑で多岐にわたると、人間的な素朴さがつい失われがちとなり、ものが豊富となった今「心」を呼び起こそうとの運動が再燃しています。

この時、往時をしのび、古人たちの「心のきずな」といわれる伝統芸の再構築を目指して、私たちの長久手町郷土史研究会第二部会は「長久手の郷土芸能」をまとめてみました。しかし限られた時間の中で資料もなく、古老から十分な聞き取りが出来なかったことが心残りです。これは総てが口承のため古資料がなく、骨組みすら出来ない部分も数多くあり、全く残念といえましょう。しかし町内の古老たちが、昔の良き時代を再現させようと東奔西走していただいたことや、資料を提供していただきました町内の各位にお礼申し上げます。またもう一步掘り下げて研究出来なかった部分については、今後の研究課題とし、ここに報告する次第です。

長久手町郷土史研究会

第二部会部長 石 崎 義 雄

目 次

○ 民俗芸能の調査に当たって	1
○ 神 楽	2
○ 獅子神楽	4
獅子舞	4
獅子芝居	5
○ 万 歳	11
尾張万歳	11
三曲万歳	15
○ 村歌舞伎	23
岩作の村芝居	23
前熊の打囃太鼓と山神楽	29
長湫の打囃	31
北熊の獅子について	32
長久手のザイ踊り	38
大草三光院の絵馬	49

民俗芸能の調査に当たって

人間は水と土壌を求めて土地を選び、生活する場を造成し、その付近に集団を形成して集落、村と社会集団を構築する。まず住み家を中心とした家族、家と家とを結ぶ小集団が集落を作り、共同の収穫作業によって小社会が形成される。このような生活の中から風俗、習慣が自然発生的に生まれて、民俗芸能化したといえよう。これは人々が生きる喜び、神や自然を崇拝する所作に、地域性を盛りこんだものが各地で豊富に編み出されてきたものといえよう。

長久手町には、何時の時代から人が移り住むようになったのだろう — 昭和44年9月、県道・名古屋一力石線（グリーン道路）の建設中に土器片が発掘された神明前遺跡（同町熊張）が明らかとなり、以後県教委の古墳発掘により、長久手神明社第1号墳、同第2号墳が発見された。これらは現在も保存されているが、同町内の他地域では岩作の御嶽山、高根山その他にも幾つかの古墳があったといわれているが、それらは整理事業等によってほとんど消滅してしまった。

これらのことによっても、長久手には、6、7世紀ごろには村人の祖先が住んでいたことが明らかといえよう。しかしその後のことは何一つとして資料がなく、人々の生活の総てが口うつしによる口承形態のため、掘り起こしは大変難しいものといえよう。郷土芸の歴史的経緯については、古資料がないため先代、先々代ぐらいに焦点を絞って掘り起こしてみた。

全会員を動員し、2年がかりの調査をしたが、掘り起こしにも難航、やっと一地点にたどりついた、といった状況といえよう。



昭和初期の農民の芝居＝長久手町郷土資料室



歌舞伎脚本

神 楽

神楽は神座（かむくら）＝倭訓栞、かみがかりの転＝類聚名物考＝などと諸説があり、宮廷の御神楽に対して、民間の神楽を里神楽といい、この里神楽を全国的にみると多くの種類がある。巫女神楽、出雲流の神楽（採物神楽）、伊勢神楽



「景行天皇社の巫女神楽」



巫女さんと、中央は指導者の山本鶴善さん

（湯立神楽）、獅子神楽などに分けられている。この神楽は神と民とが互いに慰め合うともいわれているが、一方、長命と五穀豊穡を祈る神事であるともいわれている。これが祈禱

の様式と、その庭に採り入れられた芸能の性格とにより各種のものが生ずるにいたったといえよう。五穀豊穡、生命の長寿と子孫繁栄、万物の疫病・災難の追放などを祈願する。（岩戸の舞、日月の舞、五穀豊穡の舞、五条の舞、弥栄の舞、大平楽の舞）が奉納されている。長久手町で神楽が奉納されているのは、▷長湫・景行天皇社、▷岩作・石作神社、▷北熊・神明社、▷前熊・多度社、▷大草・熊野社。

以上の各神社には、毎年の祭礼には5歳から12歳ぐらいまでの子女や専門職の巫女神楽が奉納されている。

景行天皇社に奉納されている巫女神楽は、昭和28年3月、新拝殿造営の折、水野房次郎氏、中村捨次郎氏（常滑市）から伝授し、氏子の子女を集めて始められた。その後、山本鶴善氏の指導で氏子の子女に継承、毎年奉納伝統行事として行われている。



昭和29年10月、巫女神楽を奉納した人目には、寺島岩太郎氏（左から2人目）の指導

獅子神楽

獅子舞

獅子舞は伎楽の行道面から始まるともいわれ、獅子面は露払い、悪魔払いをするといえよう。それは、面形が人間の力を超える霊力を有し、悪を鎮圧する神の威力を持つと伝承されてきたものといえよう。獅子神楽をはじめ梯子獅子、男獅子など曲獅子から嫁獅子など多くの形態の獅子舞が生み出されてきたのも一つの特徴といわれている。これが獅子芝居へと大衆芸能へ発展していったとみられている。

この獅子舞は、獅子の頭（一閑張＝木、竹ヒゴで骨組みした上に紙を貼り、紙を固めた上に漆塗りにして細工したもの）を頭にかぶり、歯でくわえて舞う。獅子頭の後ろに、母衣（ほろ）幕を垂らし、その中に2人の人が入って舞う形式（二人立ち）、一人立ちは1人が獅子頭をかぶり胸や腰に締め太鼓、羯鼓（かっこ）の類を肩にかけ打ち鳴らしながら、3人ないし8人、12人くらいまでの人が組みになって舞う形式のものがある。二人立ちの獅子は、大和後期に中国から伝来したといわれ、伎楽に「獅子」の曲があり、舞楽でも雌雄2頭の獅子舞が行われた。

その後、獅子舞は各所で行われ散楽、田楽、猿楽などの演目に取り入れられた。信仰的には仏教が獅子を霊獣としてあがめ、寺院の法会に行われることが多く、一方、神社の祭事とも結びつき、獅子頭を御神体として舞う獅子神楽や神輿渡御に従う獅子舞も生まれたという。伊勢、熱田を本拠とする神楽師が江戸をはじめ諸国を巡り、悪魔払いの御祈祷に獅子を舞わし、曲芸、面芝居を演じた一人立ちの獅子は、もともとは野山を駆ける鹿、猪の類を形どったともいわれている。土地

によっては獅子踊、鹿踊、かっこ舞、角兵衛獅子などいろいろな踊りに発展したといわれている。この獅子舞は豊穰祈願、雨乞い、盆供養、悪魔払い、火防などさまざまな形態を取り入れて舞われている。

長久手町内の獅子舞は、大字長湫字東嶋（城屋敷、砂子）の人たちが明治年代以前より始め、毎年夏に盛んに舞われていたという。青年会活動の中の一環として継承され、昭和10年代ごろまでは活発に続けられてきたという。しかし、第二次大戦勃発前ぐらいから中断され、戦後に一部復活したが、23、4年ごろに消滅したといわれている。

大字岩作は、下嶋の人が明治5年ごろ長湫連中より指導を受けて盛んとなったが同30年ごろには絶えてしまった（長久手村誌）といわれている。

大字熊張では、明治年間は盛んであったが、現在はない（長久手村誌）。しかし大正13、4年ごろには金箔の屋形を出して演じられたといわれ、昭和7年ごろ師匠から獅子芝居を習ったという。中でも熊張字早稲田の宗延寺から獅子頭が最近発見され、披露されたことは収穫だった。永年にわたって保存されてきたこの獅子頭は、傷みもひどくなく、製作年代、使用された時期などの調査は今後の課題として、研究を進めたいものと思う。ちなみに獅子頭の大きさは縦28cm、横30cm、重量900gと軽く、紙を何重にも貼り合わせ、その上に漆を塗った一閑張りの獅子頭。ほろ幕も唐草模様入りで傷みもなく、しっかりとしていたのは保存方法がよかったものと思われる。このような文化財的なものに巡り合え、今後の保存、復元が大きな課題といえよう。

獅子芝居

獅子を中心に、ほろ幕に何人かが入って踊り、胸、腰に太鼓をつけて舞い、女

役、子役、悪役をしたがえて芝居が演じられる。獅子は猫がじゃれるような仕業をするのが特徴で、これが誠に難しく、練習を積み重ねで極意に到着する妙技といわれる。衣装は紋付の下に紺股引をはき、白足袋姿。

この獅子芝居は、熊張、長湊で盛んに行われ、かなり長く継承されてきた。北熊では昭和7年ごろ、酒徳さん（尾北篠岡町の座長）や福岡徳之助さんらに習った古老たちの話では、この人たちは北熊で教えると同時に猿投村（西加茂郡）の八草の人たちにも教えていたという。その芸を猿投、藤岡村、瀬戸の大正座（中央館）などに遠征興行していたといわれている。得意とする演題は、阿波鳴門、壺坂霊験記や巡礼、孝行ものをよく演じられたものといわれている。

長湊では砂子（城屋敷、砂子）が最も盛んで、山田鉦太郎さん、山田太三郎さんらが中心となって獅子舞を演じ、山田宮一さん、山田俊治さん、山田喜代三郎さん、山田徳四郎さん、山田鉦一さんらが嫁獅子を中心に獅子芝居を隆盛にした。この人たちから継承した山田吉一さん(57)は獅子芝居と歌舞伎を演じ、獅子唄の出だし「まあえ、はあえ…」や朝顔日記の義太夫の一部を声高に即披露。よき時代を回想し、目をうるませていた。また山本桂さん(60)、山田助夫さん(55)や山田金正さん(55)らも獅子芝居や歌舞伎を演じ「父らは息子が好まなくても無理にもやらせたものでした」と楽しかったよき昔を回顧していた。これらも青年会活動の一環として行い、旧暦の3月、11月など農閑期を利用して行っていたが、完工式、記念日、祭礼など各種催しが多くなり専門職化する傾向も一時期にはあったといわれている。練習は集会場、広場などで朝早くから夜遅くまで何日も行われた。興行場は、お薬師、常照寺下、公会堂、小学校校庭などに芝草（野外）小屋を特設して大勢の村人を集めて催された。テレビ・ラジオもない一昔前には、このような催しが村人にとって最上の娯楽であったと古老たちは「どんな遠くへ

でも、よく見に行ったもの」と口を揃えて昔を語っていたのが印象的だった。特によく行われた演題は、阿波の鳴門・子別れ⑩⑪や矢口の渡だったといわれている。



獅子芝居 『傾城阿波の鳴門』

台詞 巡礼（おつる） 巡礼にご報謝
獅子（お弓） ウマー
手もいじらしい巡礼の娘 ウマー
どれどれ報謝を進ぜましょう

（山本鶴善氏 画）



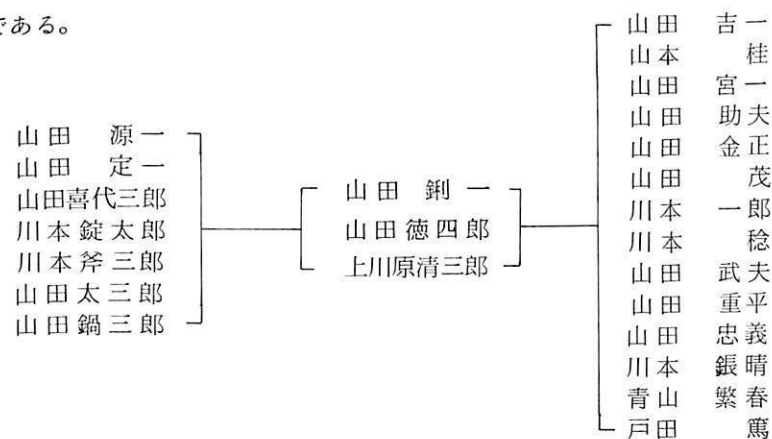
昭和21年ごろの砂子の芝居同人、芝居舞台が終わって記念写真
＝ 長湫城屋敷・山本桂氏 所蔵



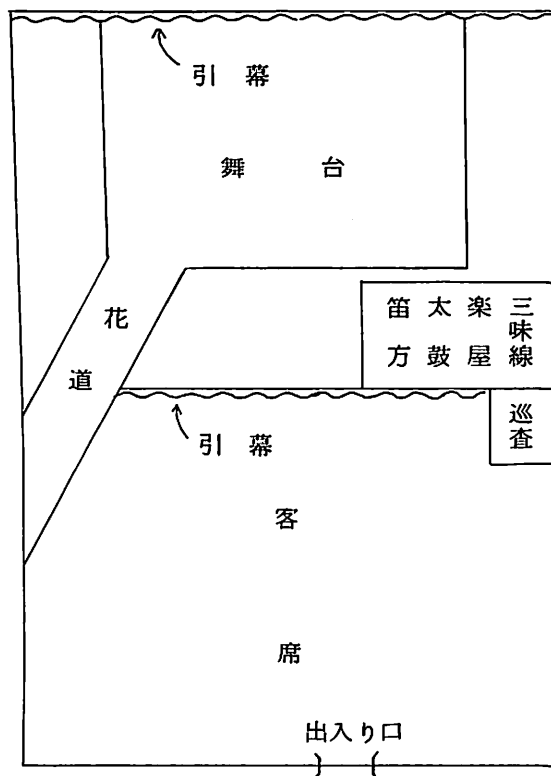
昭和22年ごろの芝居興行、
忠臣蔵六段目の原郷右衛門
（山本桂氏）
山本桂氏 所蔵

こうした演劇活動は、戦禍が激しくなるに従って中断、戦後復活し、昭和24、5年ごろまで続けられた。興行が増え上演回数が多くなると玄人芸のように練磨され、このため他の市町村からも来演依頼がかかり“地方公演”となってくるため多忙も倍加した。名古屋の振甫プール、瀬戸、尾張旭市の秋葉さま、知多郡、西加茂郡など広範囲にわたった巡業が重なり、時には自家の農作業も手つかずで、他人まかせになったほどともいわれた。こうしたことから農作業の途中で休憩になると、田の畦道で発声練習や台詞の暗記、動作の練習に余念がなかったといわれる。特に女役の場合は道を歩く時も内股で歩き、総ての動作も女性らしくしなやかな訓練を普段からやれとよくいわれていたという。なかでも地方巡行の折は、自転車の荷台一杯に諸道具を積んで、石コロがごろごろする砂利道を走り回ったり、馬車に荷を載せて1日かかりで現地についた苦労話を懐かしんで古老たちは語り続け、現在の車社会とは想像もしかねるものといえよう。

これらの芝居には役者のみでなく、鳴り物を演ずる鉦、太鼓、ひちりき、横笛などの奏者と呼吸を合わせるため、総合練習には一段と熱が入ったといわれている。この他に雑役係、弁当持ちなど大勢の人たちで一集団をなしたものは大変なものである。



掛け小屋は、麦畑の上にワラを敷き、手織り筵（むしろ）を置いて客席をつくり、舞台及び周囲は丸太の木材や稲架竹（はざだけ）を組んで縄しぼりして組み立てる。手織り筵で周囲を囲い木戸口を開けて出入り口にする。舞台の脇には、笛、太鼓、三味線の囃子方や語り師（浄瑠璃）＝この席を触り部屋とか浄瑠璃部屋といった＝の席があり、その近くに駐在さん（巡査）の見張台が設けられ、観客の治安が気づかわれていたといえよう。野外場以外では薬王山豊善院の籠堂は、昭和初年に建立され楽屋や舞台によく使われ、また仙寿山常照寺下（参堂右の麦畑）や西廻間の天王池南東、村道端の区有地（山本亀助氏宅前）などでよく興行されたものだった。



万 歳

尾 張 万 歳

万歳は太夫と才蔵の二人一組で、はなやかに問答、祝言を掛け合いで歌い、鼓を打って舞い、正月に家々を回って家内繁栄を祝い歩くもの。長久手地域の万歳は尾張万歳で、この万歳は長母寺（名古屋市東区矢田町）の開山無住国師（1226-1312年）が仕えていた弟子に教えたものが初めといわれている。

万歳は次の五万歳から出来ている。

1. 法華経万歳 = 無住国師が日蓮の教えを説いているもの。
2. 六条万歳 = 親鸞聖人の一代記を詠ったもの。
3. 神力万歳 = 神々の名を挙げ、熱田の造営を詠ったもので、熱田万歳ともいわれている。
4. 御城万歳 = 江戸城をたたえ、江戸の町や大名屋敷の繁栄をたたえたもの。（御殿万歳）
5. 地割万歳 = 家を建てる時に祝う万歳で、どこでも、何時でもうたえる歌詞で、一番最後につくられたといわれる。

尾張地方全域にわたる万歳で、半田、常滑、東海、知多市や名古屋市、尾張旭市、愛知郡日進・長久手町、それに師勝町…などでは、まだまだ門付に回る老万歳師が一人、二人いるという。（文化財叢書55号、愛知県教委刊「尾張万歳をたずねて」）

万歳の伝播経緯は、猪子石（名古屋市）から菱野（瀬戸市）→岩藤（日進町）をへて長湫（長久手町）に伝えられたといわれている。この年代は不詳であるが、後年に伝授した村瀬止朗さん（長湫五合池）と川本定一さん（長湫下山）らが、その後、多くの人たちに伝授したと伝えられている。万歳も時代とともに門付け

万歳から座敷万歳、舞台万歳へと移り変わっていった。特に座敷万歳は、お日待ち（1月7日）の夜に個人の家の8畳二間ぐらいで開くため、隣近所や親類を大勢寄せたもの。なかでも大寄りの時は、張り紙を貼って知らせたり、ふれ太鼓をたたいて近所の人を集めたこともあるといわれる。こうした場には数多くの花（祝儀）＝半紙に大書したもの＝が、8畳間の鴨居一杯に貼られ部屋中がにぎや



万歳（御殿舞）の年頭回りの
村瀬止朗氏



かな雰囲気をかもし出していた。これら座敷万歳では、川本金太郎氏（長湫・西洞）、川本平太郎氏（長湫・西洞）、川本春一氏（長湫・西洞）らが演じられたといわれている。

また演芸のときに万歳が洒落をおり込みお笑いを入れる。

鶴なら舞いこめ

亀ならのたりこめ

五石千両箱どんどと 持ちこめ、 あいならえー

と観衆を笑わせたものだった。

こうして盛んに演じられた万歳も、時代とともに衰退し、昭和30年代ごろまでは細々と受け継がれてきたが、後継者難などにより姿を消してしまった。

御殿舞いは次のような歌詞で舞われていた。

御 殿 舞

- 陰陽鶴にもすぐれし亀にもまさりて目出度くもヤレ
- 見鶴の舞アゝウ宴もヤアそうまあーにヤレ
- 黄金のいっさい、ごうほんも一寸敷き並べてヤレ
- 千代も重ねーてヤレ万年万年も一寸咲き栄えてヤレ
- 御代も久しーくヤレお家も栄えて一寸ましますヤレ
- 利正おやこをなるヤレ玉むの冠一寸こおほゝべにめすヤレ
- 綾なる袴をヤレはア、ウえて運びヤンノ、ホゝ金字なる刃をヤレ
- 腰にと差してんな ゆんずりはーをヤレ
- 口にイーとふウーくみしごん用オーなーるヤレ
- 松の葉をホナ手ーへこに持てへんな

- 宝の君な一るヤレ源氏が御門とぞ一寸ついたわちてへんな
- 内しが御門とぞヤレ押し開いてへんなおんおーせいばヤレ
- 和合ようでさアーは二八むうらわはすヤレ
- 遠門た一いよりヤレ久しも変るべくたンめーすに一わヤレ
- 水もかがやーくヤレ木の芽も咲いてンな一寸咲き栄ゆるヤレ
- 祝の御門と一ぞヤレほめ喜ょんでな、きんきょうやーのヤレ
- たてゝがなホナゴーホゝゝ万才よアラいぬいーのすーみよりヤレ
- 黄金のおしばーを持って、左まきにも、うぎりと右ぎりまきにもきりうぎりーとヤレ
- 一夜一夜やあめん、めうに万本ばかりの柱おゝーばヤレ
- おっとりいこんで一寸あわすれんば一本の柱が一ふーのお宮、ますみ高尾の大明神よ
- 二本の柱が二の宮様、三本の柱がさかきの明神
- 四本の柱が弁才天よ、五本の柱が津島の神社
- 六本の柱が正八幡よ、七本の柱が七尾の天神
- 八本の柱が八剣宮よ、九本の柱が熊野の神社
- 十本の柱が十郎節、十と一本の柱とて いくーこやつるぎ 熱田の大明神よ、十と二本の柱とてほり切り薬師の十二神よ、十と三本の柱とて大凡（おおよそ）三十三六土神が一寸あまくだら一せて、めのおの意志は此のお家
- 陰陽あくじ さいなんは これを見て 七里と奥へ逃げ給う 福の神は こ当
家様 意万才楽に お候らえんば さてこそはこのお家

三 曲 万 歳

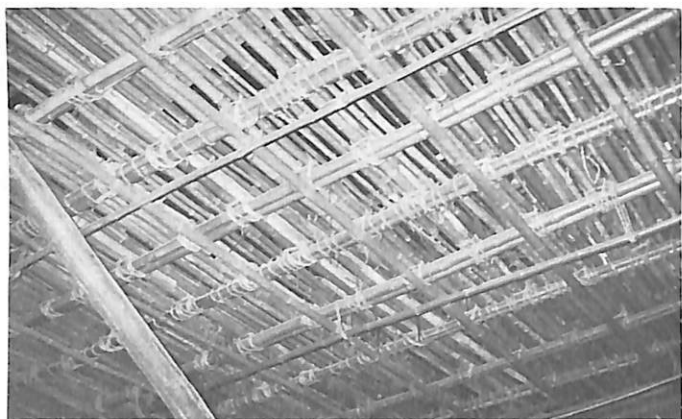
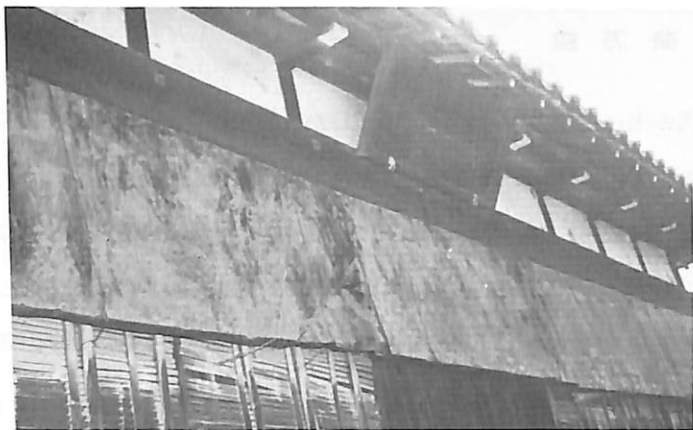
江戸時代の末ごろ知多市八幡町に発祥した三曲万歳を明治の中ごろに阿久比町で受け継ぎ、大正、昭和と継承されてきた（愛知県教委・郷土芸能）。これは万歳から発展し、鼓弓、鼓、三味線の三つの楽器を使って、義太夫の歌舞伎芝居から「関取千両幟」「神霊矢口の渡」など面白く万歳化したもの。さらにこれを芝居化したものを万歳芝居といい、これが発展して三曲劇となる。三曲万歳や万歳芝居で、よく演じられたものは次のようなものがある。

「仮名手本忠臣蔵三段目」「同五段目」「朝顔日記」「彦山権現お菊殺し」「伊賀越道中内の段」「神霊矢口の渡」「箱根権現膝行の仇討」「関取千両幟」「梅川忠兵衛」「恋女房白木屋内の段」「歌祭お染久松の段」「恋路飛脚」「大和往来」「阿漕平次内の場」など。

昭和5年には万歳大会が、お薬師で盛大に開催された。この記念掲額が薬王山豊善院（お薬師＝長湫内越）の本堂に今なお奉納されている。



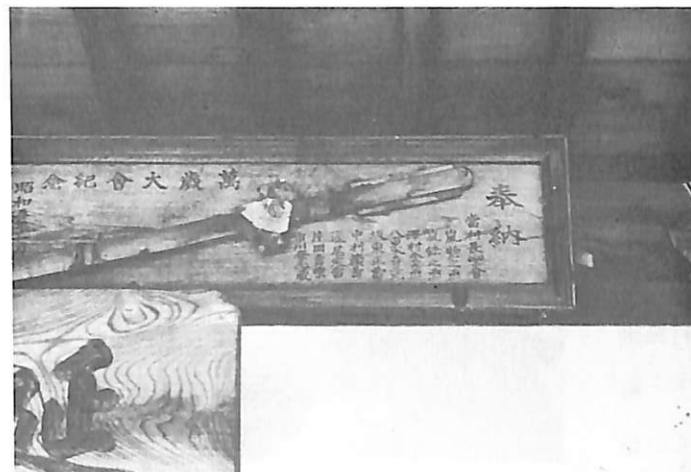
薬王山豊善院本堂右側にある籠堂



長久手の郷土芸能の舞台となったお薬師籠堂の扁額⑬
とその内部の天井の竹簀⑭

この奉納掲額は縦37.5cm、横115.5cm、厚さ5cmの桧板に破魔矢を熨(のし)糸でしばり、御幣の形にして、當村長楽会の役者9名の名前を入れて奉納、掲額されている。

薬王山豊善院（お薬師）の本堂に奉納されている
「万歳大会記念」掲額 = 昭和5年7月



奉納者は

嵐 惣之丞	=	川本 惣四郎	(長湫・西 浦)
嵐 鐐之丞	=	寺島 鐐一	(〃 下山)
澤村 金之丞	=	川本 金太郎	(〃 西 洞)
八重本 喜三丸	=	山田 喜三郎	(〃 城屋敷)
坂東 正寿	=	寺島 正一	(〃 下山)
中村 頼寿	=	川本 頼久	(〃 西 浦)
浅尾 定當	=	川本 定一	(〃 下山)
片岡 寿楽	=	村瀬 止朗	(〃 五合池)
市川 登志蔵	=	村瀬 鋼之	(〃 西 洞)

これらの掲額からも分かるように、長湫では当時、万歳芝居が盛大であり、名代の役者名も受ける程の熱の入れようだったといえよう。また舞台もお薬師本堂右にある籠堂（間口5間、奥行き3間）を使い、前庭に呉座筵（ござむしろ）を敷いて大勢の人たちが観覧したものといわれ、村中が一緒になって楽しむよき時

代であったと回顧されている。

三曲万歳芝居、
三曲劇を演じた
寺島正一さん

(長湫下山、84
歳)は、村瀬止朗
さん(75)、川本定
一さん、村瀬銈
之さんらと一緒に
13歳ぐらいか

ら習い始めた。
指導を受けたの

は瀬戸市の柴田

留三郎さんで、最初は三味線、
鼓弓など楽器を1年ほど習い、
その後、忠臣蔵三段目の「お
かる」役で出演、それ以来、
女形を演じてきたが、その女
形の所作には苦労の連続だっ
たといわれる。大正初期から
演じ、第二次大戦前まで芝居
演技に打ち込んできたが、終
戦後は、衣装貸しをしながら



三曲劇の台本、諸道具を机一杯に広げ、郷土史研究会
員を囲んで、思い出話に話がはずむ寺島正一さん(中
央)＝寺島正一さん宅で



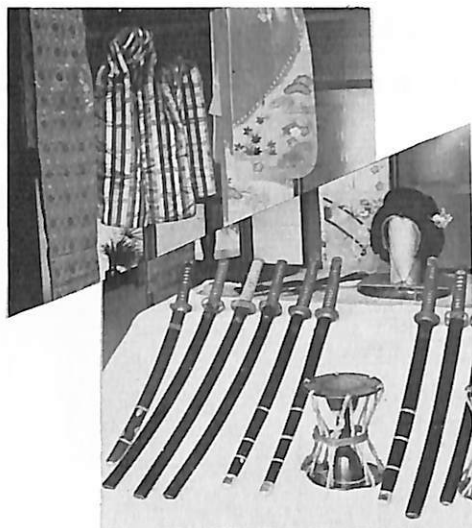
大正十三年ごろ、吉野山千本桜の静御前の役衣
姿・坂東正之助「お薬師の籠堂」前

町内の青年たちに演劇と棒の手指導に尽力した。戦後芝居を教えたのは、近藤音
三郎(下権田)、村瀬光芳さん(打越)ら30余人にのぼったという。芝居の話
をする寺島さんは、一昔前を懐かしみ身をのり出して話がはずんだ。最初はセリ
フを覚えるのが大変で、毎日が練習だった。それがだんだんと苦にならないよう
になった。しかしタチの練習は、家でやると畳が傷むため、香流川の河川敷を利用
して早朝から日没まで続けた努力の賜だったという。興行は農閑期を利用する
ため、3、4月ごろと8～10月が主で、当時は自転車に柳ゴウリを積み、7～
8人であちこちへ走り回り、遠方へ行く時は、夜通し走ったといわれ、総てに大
変さが伺い知れた。こうして始めた芸道も趣味がこうじて大正8年ごろから芝居



昭和22年ごろ、景行天皇社拝殿前広場で行われた村芝居
＝山本 桂氏 所蔵(長湫の城屋敷)

専業となり、他地域からの指名も増えていった。こうして売り芝居になると芸一筋に生きるため、今まで以上に芸道の厳しさが増し、連日芸の練磨にムチを打っていた。巡業先は瀬戸、豊田、小原、三好、日進、猪高、平針、植田、三河、知多、名古屋と広範囲にわたった。十八番は、吉野山千本桜道行の静御前の役で、蔵から取り出したカツラや簪（かんざし）をつけ、しなやかな身振り、手振りの舞いは、しみついた芸道がいまも身から離れず、女形の得意芸のお披露めとなり、よき一昔前の再現は、素晴らしい光景であった。



前熊万歳と記念碑

万歳はかなり古くから行われていたもので、前熊の前熊寺の前庭には、明治45年6月に建立された万歳記念碑がある。このような立派な記念碑が建立されたのは、この地域でもかなり盛大であったといえよう。碑の高さは93cm、幅40cm、表に萬歳記念碑 水野喜助と彫られ、裏に明治45年6月之建とあり、与語由太郎ら6名の名前が彫られている。

今も大切に保存されている芝居道具一式Ⅱ野崎村の衣装、ダラリ帯、着物、帯、カツラ、刀、鼓や小物など（寺島正一氏宅で）



→ 前熊寺境内に建立されている萬歳記念碑
Ⅱ 明治四十五年六月建立

裏

明治四十五年六月之建

浅井太三郎	伊藤芝三郎	水野信三郎	青山定一	中野滝三郎	与語由太郎
-------	-------	-------	------	-------	-------

表

萬歳記念碑

水野喜助

前熊万歳の起源は詳でないが、前熊村の水野喜助（明治5年生まれ）が、日進町藤枝の萩野沢重とコンビで明治25年ごろから習い始めたといわれている。

その後村内の同好門弟を募り、演技を積み重ね毎年事始めの正月1カ月ぐらい三河方面へ旅回り行い前熊万歳を披露していた。

明治30年夏ごろ、前熊地区に赤痢が大流行したため、疫病除けと銘打って素人による大芝居が中島地内に仮設舞台を設けて開催。村内はもとより近郷からも大勢の見物人が押し寄せ大盛況であったという。この時、村内からも万歳、芝居役者が多く出て腕前を競ったといわれた。

師匠の水野喜助は老齡を期に後進に道を譲るため、明治45年6月、引退記念万歳大会を前熊寺で催した。盛況裡に終わり、記念碑を建立、引退後は門弟の指導に専念、大正13年54歳で病没。その後も門弟により万歳が暫く続けられ、前熊寺境内の記念碑が当時の盛大さの面影を偲ばせているといえよう。

また門弟の北新田の村瀬久一も指導を受けた一人で、本綿の股引の両膝部分が擦り切れる程の猛練習だったと言いつがれ、その様子を伺い知ることができよう。



村 歌 舞 伎

岩作の村芝居

村芝居の歌舞伎は、永禄年間（1558 - 1570年）に名古屋の人・名古屋三左衛門らによって発祥したといわれている（尾陽劇場事始）。享保期（1730年代）には七代藩主・徳川宗春によって芝居奨励策がとられ、名古屋が芸どころとして芽生え、歌舞・音曲が各地に広まったといえよう。

娯楽の少なかった時代は、こうした芸ごとが、伝承されて農村の人々にまで浸透していった。

長久手町大字岩作地域に於ける歌舞伎、いわゆる村芝居は、明治時代の後期から昭和20年代ごろまで盛んに行われていたといわれる。これは青年会活動の中で生まれ、さらには専門化されていくのも数多くあったと聞く。当時、町内各所の神社、寺院の広場やその他の広場、畑などにムシロを敷いて小屋がけした仮設場を設けて数多く上演されたといわれる。また女義太夫語りも流行した時代もあり、巾広く演劇活動が行われたともいえましょう。田舎歌舞伎で演じられた外題は、忠臣蔵三段目、同十段目、勘平腹切、太功記、本能寺、尼ヶ崎の段、朝顔日記、菅原伝授手習鑑、安達ヶ原、熊谷陣屋、先代萩、紙屋治兵衛、義経千本桜、佐倉宗吾などである。

岩作地域で特に盛んに行われたのは、大正の初めごろから昭和初めだったといわれている。当時演じられた人々は、浅井常三郎、浅井秋太郎、浅井留三郎、川本治助、林保次郎、武田高治、福岡先三郎、日比野義信、倉地藤太郎、川本清一、川本秀一、加藤周次郎、加藤千太郎、浅井兼広の各氏らであった。しかし常設小



白浪五人男

昭和20年代の岩作の有志による
白浪五人男



歌舞伎台本



歌舞伎台本

川本治助さん（岩作）
所蔵



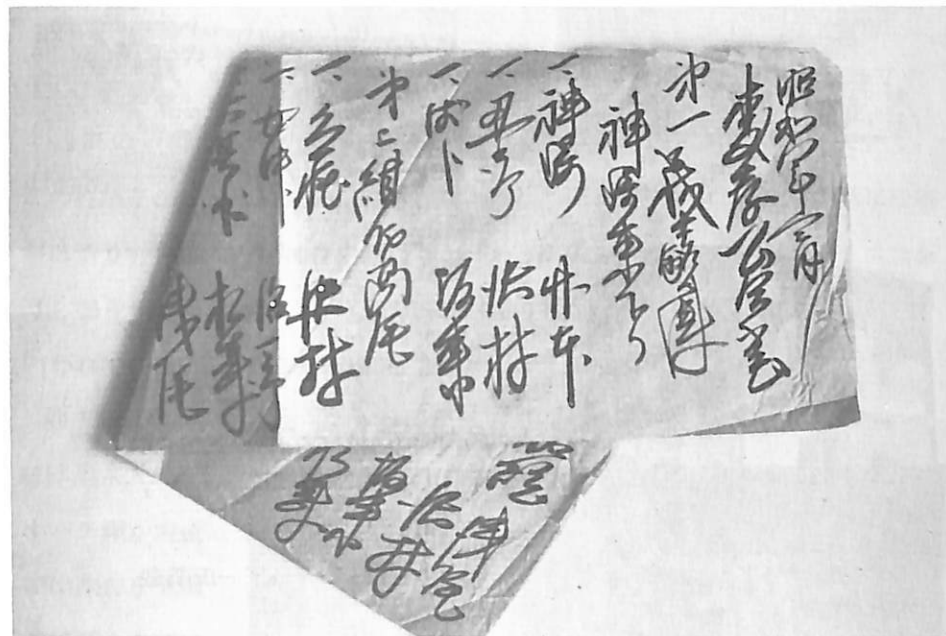
屋もなく、興行の都度、広場に舞台を丸太で組み、むしろ掛けの仮設小屋で演じ、また芝居に使う大道具、小道具、衣裳などは町外から借り、これら芝居にかかる必要経費は、寄付や見物の人々よりの花代、祝儀で充てていたといわれている。特に石作神社の1100年祭（昭和5年ごろ）や御嶽山の記念の催事、その他神社の年祭などには盛大な芝居が催されたといえよう。

当時、芝居が始まる1カ月ぐらい前になると、農作業を終えた夕刻や休日には、あちこちの広場や、田のあぜ道などでの練習風景が見られ、これを見物する光景がみられるとともに、付近住民の語り合いの場ともなったといわれている。

岩作歌舞伎は、昭和17年ごろまで青年会活動の一環として上演されてきたが、第二次大戦が急迫すると共に衰退してしまった。

昭和の初めごろ、広場に丸太を組んで小屋をかけ、簾を敷いて観覧したものだったと昔を思い出してもらったのは岩作の武田信司さん。この人は浅井常三郎さん（岩作）を師匠として習い、終戦前までと戦後の一時期に歌舞伎を演じ、過ぎし日の良き時代を回想していた。役の選定は青年団長らが決め、三味線、浄瑠璃は習っている人に依頼し、小屋がけは消防団と在郷軍人らが行い、多くの人たちの協力で興行したといわれている。

岩作の倉地藤太郎氏は昭和10年頃に、ブラジルへ移民された。



昭和8年3月

森孝公会堂で行われた歌舞伎役者の割り振り。





芝居小屋前に掲げられた大のぼり
(片岡寿朗＝村瀬止朗氏の芸名)
と舞台正面の大幕
＝ 寺島正一氏所蔵



前熊の打囃太鼓と山神楽

前熊の打囃は、徳川時代から継承されてきたもので長い歴史をもっている。この打囃子が始められたのは、昔、八剣神社（現多度社）のころ前熊集落に疫病がはやり、村の人々は神社のたたりとうわさが広まったため、神社に笛、太鼓を打ち鳴らして祈願した。こうした祈願により村民の病気が回復したことが起源といわれている（愛知県青少年育成会議刊「郷土芸能」）。

前熊打囃太

鼓は笛太太鼓、

小バチ銅が唐金

で出来た小太鼓

で構成されてい

る。曲目は「七

山」「新時雨」

「小時雨」「中

時雨」「大時雨」

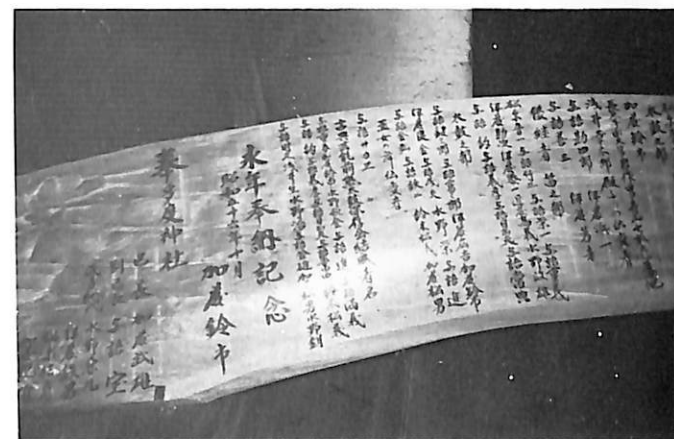
「しゃぎり」

「合時雨」「金

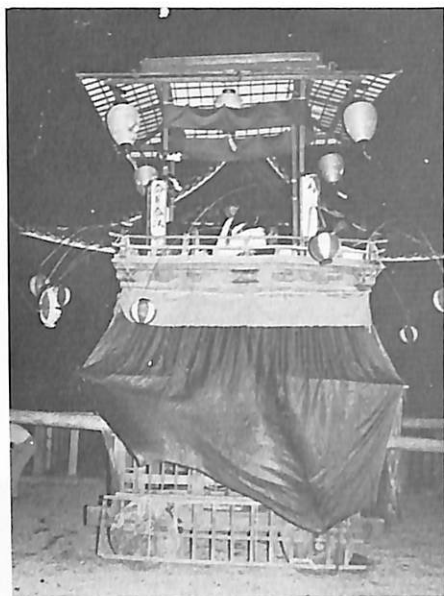
龍」の8曲の種

類の「リズム」がある。古老の話では太太鼓の銅の内側に尾州山田庄前熊村と書かれており、この山田庄とは豊臣時代に使われたらしく、約350年前から伝わっているといわれている。

戦前は盛大に7月16日に行われる地区内の津島神社の天王祭と8月24日の



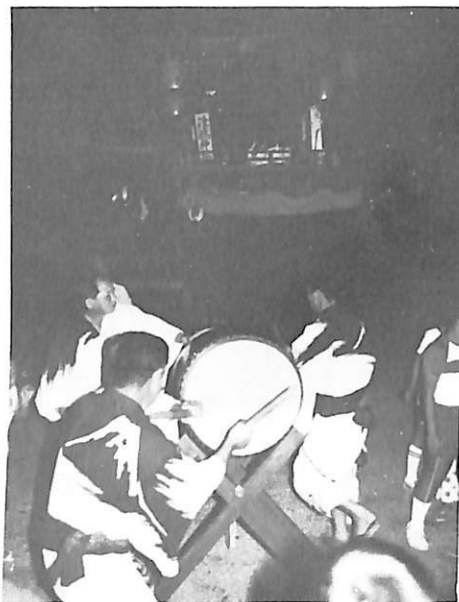
前熊・多度神社の前熊古典芸能保存会の永年
奉納記念掲額 昭和56年10月 奉納



250年の伝統を誇る「前熊の山車」

保存会が結成された。また、享保・元文（250年前）ごろの前熊の山車「天王車」（昭和58年6月、長久手町指定民俗文化財）も祭りに花を添えている。これ以来、伝統の灯は燃え続け毎年盛大に行われ、祭り前の練習も一段と熱気がこもっている。

前熊はやし太鼓＝大太鼓、笛、小バチで威勢よく打ち鳴らされる伝統芸（大太鼓の胴の内側には、尾州山田庄前熊村と350年前の銘が入っている）



前熊区の墓地の地藏祭りの時、青年会の手で奉納して村内の家内安全を祈願した。その後、青年会の弱体化と共に衰退の一途をたどり昭和37年を最後に有名無実となった。最近になって伝統ある前熊打囃太鼓を守ろうと、昭和50年8月に有志で後継者を養って行くため、与語竹三さん、加藤鈴市さん、与語重春さん等を師匠に前熊古典芸能

長湫の打囃（うちはやし）

長湫の打囃は、明治のころから大正10年ごろまで盛んに行われていたという。これは青年会が盆供養の一環として行い、旧8月14日は豊善院へ、同24日（盂蘭盆会）は常照寺へと打囃を奉納していた。精霊送りと同時に家難、災難除けと家内安全を祈願する行事ともいえよう。若い衆たちは7月の農休みを境に、笛、太鼓の練習に入り、14の嶋が交代で太鼓屋形を組む。この屋形は丸太と竹を組んで作り、屋形の上には若竹に赤、白やしまの提灯を下げて飾り、中には2人の太鼓打ちが入る。この屋形を2人でかついで各分会詰め所から寺院まで練り歩く。7時ごろから1時間ぐらいかかって集落内を練り歩き、その後には大人や子供たちが行列をつくっていく。かかりは寄せ太鼓の音で人々が集会し、道中は道中囃で行列が進み、寺院に入ると打上げ囃の順序で威勢よく打ち鳴らされ、心が躍る光景だった。特に豊善院では、護摩をたく時にホウ貝も吹かれ、まさに豪快華麗な光景といえよう。この後、9時ごろから盆踊りに入り大人も子供も輪になって踊ったといわれている。また打囃の参道には絵行灯が2m間隔ぐらいに点灯され、ちょっとした不夜城の光景をかもし出したともいわれている。この絵行灯は1名書き行灯といわれ、思い思いの絵や歌が書かれて参拝者の目を楽しませたともいわれている。



長湫打囃＝大正中期の図
（山本鶴善氏画）

北熊の獅子について

朝早くから、獅子芝居の“寄せ太鼓”が鳴り響き、村全体が浮き立っていた。席の確保に走り出す者、互いに誘いあう者、付近の村の人達も山越えて見物に急いでいる。

今日は「天王祭り」（津島神社の祭礼）。獅子芝居奉納の日である。神社の広場は、お囃子の軽快さに、一層華やかになってきた。

獅子頭を奉持した「若者連中」は、若者集会所から神社まで、所々で“悪魔払い”をして神社に向かって行く。獅子舞の見物者も、それに従っていく。若者連中は、15、6歳ごろより兵役20歳までの者が全員入り、獅子舞をして伝統を守っている。

一方、芝居小屋では「獅子芝居連中」（年寄りと若者の芸の好きな者の集まりで出来ている）が、開演準備に忙しい。

芝居小屋は、前日までに、若者連中と郷の関係役員の援助で、幕（北熊村の名入りの幔幕）、五月節句の幟、丸太、はざ竹、席、餅臼、くぐり戸、床台（既設の畳1枚位の大きさ



北熊の獅子舞の台本 = 近藤善治さん所有



北熊の獅子舞の台本 = 近藤善治さん所有

のもので数十枚あり、脚付きのものもある）等を使用して作られたものである。

舞台の上座には、獅子頭を安置する金箔の「神楽屋形」がある。演技者は、紋付き、羽織、帯は赤か白の角帯、

下は黒か紺の股引き、黒足袋。獅子頭をつける者は、女の主役を演ずることが主であるので、赤系統の派手な襦袢や金糸入りの裾模様の着物を着ることもあり、白足袋を着用して今か今かと待っている。

若者連中の到着。寄せ太鼓が一段と賑やかになる。屋形に納まる獅子頭。

開演。上座に音楽のお囃子連中。楽器は長太鼓、小太鼓（締め太鼓）各1個、横笛（草笛の七穴）。その他ヌサ（1、2尺程度の棒の端に紙の白丸房をつけたもの）1本、鈴（柄付きで鈴は三段になっている）が用意される。義太夫語りと三味線弾きが下座の御簾の中に位置し、チョボ（黒子）が主役のシテ役の脇につく。シテ役の獅子頭をつけるものが、矢形の前に正座し、獅子頭をいただく。

幕の舞が始まる。手になにも持たずに、チョボが付いて、所作事をお囃子につれて舞う。続いて、幣の舞（悪魔払い）に移り、チョボは、獅子頭の付近に胴衣を纏め下がる。これからが見せ場の一つで、高く放り上げたヌサを鈴の柄で受け

たり、また逆をしたり、ヌサの踊りや爪先で立ったり、足を裏返して歩いたり、内股歩きや回転などの曲芸をして目を見はらせる。演技者は、獅子面の開いた口からのぞいて演技をする。ここまでが神楽の部である。

次が中幕を払い、芝居(段物)の部である。間奏が入る。浄瑠璃から取材したもので、すべてサワリの抜粋である。

忠臣蔵(仮名手本忠臣蔵)

三段目 裏塀の場

七段目 一力茶屋

朝顔日記 宿屋 大井川の段

阿波の鳴門(傾城阿波の鳴門) 子別れ

苅萱 山の段 石童丸子別れの段

矢口の渡 頓兵衛住家の段

このようなものは、好んで上演され、熱演に対して客席から菓子袋やおひねりが舞台に投げ入れられた。お囃子と歌と義太夫が融け合う面白さと舞台と客席が一体となる地芝居の雰囲気は素晴らしい。

古い台本が近藤善治氏宅にあった。文化2年(1805)発行のものに先祖の善九郎氏(明治32年、66歳没)の自己のせりふの印が全編にある。

明治後期から大正時代の全盛時代の人

獅子 近藤甚蔵、福岡徳之助

朝顔日記 近藤貝三郎、近藤松次郎

阿波の鳴門 近藤喜代松、近藤八千子

忠臣蔵 近藤助三郎、近藤静一、近藤儀三郎、近藤儀十、三岡金作

歌とお囃子 近藤米三郎、近藤鹿一、三岡金作

笛 近藤甚太郎、近藤桑三郎

北熊村の獅子芝居(通常獅子という)は、明治初期に尾北篠岡町の座長格・酒徳さんを招き教えを受けたのが始まりといわれている。それ以降、娯楽性の乏しいこの村に新風が吹き、村こそってそれを伝承し、若者連中が獅子頭の保管に当たった。天王祭には毎年、その他のグループ活動のような活躍が、正月、大日祭等で行われ、神社、寺、忠霊塔西、黒衛門宅前等の広場でしばしば行われた。

当時は寒村で花代と自費で上演し、自田を手放した人も当村には多い。娯楽を求め、心の糧として熱中した。練習時間もなく、農耕のかたわら、また歩きながら、休憩中など時間のある限り、互いに練習したものらしい。マンガ(農耕具)をアゼで後から放り上げて前で棒で受け止めたり、前転、後転、獅子歌を口ずさみ子供が諳じてしまった等の逸話もある。

明治から大正にかけて全盛期であった獅子芝居は、瀬戸の大正座、坂下(春日井)、大曾根(名古屋)、猿投(豊田)等へ出張し出演したのもしばしばであった。大正7、8年ごろ近藤浅太郎氏が尾北の座長格の新丸を招き上演させて熱を入れた。隣の八草村へ、甚蔵、徳之助、喜代松、米三郎、金作等の人々が大正末期より1年ほど両地で指導している。八草の獅子は昭和24、5年ごろまで続いていたようである。

昭和中期ごろより、戦争の影響を受け始めて、娯楽も変化し始め次第にこれを伝承する人は少なくなり衰微した。

コピー 台本(文久2年本) 近藤義治氏蔵

台本(明治初期のものか。尾北篠岡講中のもの) 近藤義弘氏蔵

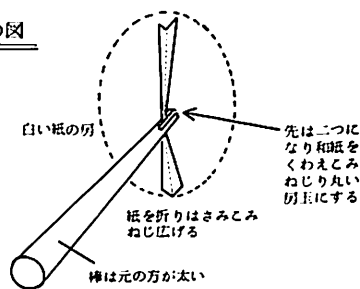
文献 獅子舞奉納届 近藤義弘氏蔵

参加者

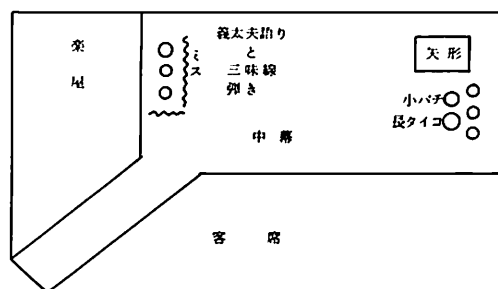
浅井和彦 (北熊)
 近藤時雄 "
 " 善治 "
 " 錠一 "
 " 義弘 "
 " 元政 "
 " 孝 "
 " 勘一 "
 中野稲彦 "
 柏本寛一 (豊田)

近藤和三郎
 浅井 稔

ヌサの図



芝居小屋



愛知郡上郷村長水野弥左エ門殿

同文

(明治三十一年七月二十六日
 控記帳より)

愛知県熱田警察署長警部 近藤勝男殿

浅井 彦十郎
 近藤 徳三郎
 浅井 太兵衛
 近藤 重助

右社氏子総代

間此段御届仕候也

祭ニ付村民ニテ素人獅子奉納仕度候
 祭ニ付村民ニテ素人獅子奉納仕度候

一、無格社津島神社

右ハ本村無格社津島神社来ル八月二日例

愛知上郷村大字熊張

例祭ニ付獅子舞奉納届

近藤善治さん宅に保存されていた、今から百八十年前(文化二年)の台本



長久手のザイ踊り

長久手町大字前熊に、随分古い時代から受け継がれてきたと思われるザイ踊りがある。いつごろ生まれたものかは、踊りが口承の上に伴奏楽器を使用しないので、年代を考察する資料に乏しい。古老の話を手がかりに明治後半から現在までの推移をたどってみた。（尾張旭市印場には200年以前より伝わるザイ踊りがある。毎日新聞記事＝昭和57年9月3日付）

ザイ踊りは毎年旧盆に先祖の供養のために行われるもので、演技者は5歳から12歳までぐらいの女の子である。長い袂（たもと）の着物に赤い褌（たすき）をかけ、麻裏草履で、双手にザイを持って舞う。ザイは50cmぐらいに切った竹の両端に一方は25cmぐらい、もう一方はその半分ぐらいの長さに和紙を細く切ったものを房状に束ねて付け、先端を紅色に彩色したもの。昔は大福帳等をほぐした紙を使い先を染めるのに食紅を使ったといわれる。演技者は「阿波の鳴門」の物語を詠った歌等を歌いながら輪になって様々にザイを振り、打ち鳴らして踊る。哀切な歌と可愛らしい女の子の踊り姿は盆の雰囲気をやが上にも盛り上げたに違いない。

与語ハナさん（81）の話によれば、7月16日のお天王様、8月7日は観音様で前熊寺、8月14日と16日はお盆で昌隆寺、8月24日は盂蘭盆でお墓所の六地藏の前、21日は大草弘法様でザイ踊りが行われた。近来では「巡礼おつる」だけが歌われているが、古くは「石童丸」「花づくし」等があった。

聞き得たかぎりでは一番古い師匠に水野つうさんがある。明治生まれの演技者を教えた師匠で、与語ハナ、水野静子（没）、水野春子、松原キヌ（没）、浅井つや、松原ツネさんらが演技者であった。次に大正生まれの演技者を教えた師匠に

与語タミ、松原ツネさんがある。加藤ハルノ、松原スエコ、与語ヤチコ、松原サヨコさんらが演技者である。次に昭和ひとケタ生まれの演技者を教えたのは明治生まれの演技者を教えた水野つうさんと、加藤スエ、水野レン、伊藤クワさんら御詠歌仲間でもあったが水野つうさんと共に昭和生まれの演技者の育成に尽力した人達である。与語志津子、水野喜代子、与語チマコ、与語ハツコさんらの演技者達は太平洋戦争の少し前にNHKに出演した事があり、これを引率して行ったのが水野つうさんである。昭和生まれの演技者によって北熊にもザイ踊りが伝えられた。それに尽力したのが福岡清一氏である。前熊の演技者と同じ年頃の北熊の子供達は前熊の庵主さんで、前熊の子供達からザイ踊りを教わり、9万9千日の日に宗延寺でザイ踊りをした。柴田しず子、加藤シナ子、近藤光子、浅井フキエ、近藤幸子、吉橋とめ子さんらである。

戦後、前熊、北熊、岩作等で散発的にザイ踊りが行われた事があったが長くとぎれていた。昭和51年に林晴子さんの努力によって忘れられかけていた歌詞が掘り起こされ、かつてNHKに出演された与語志津子、水野喜代子、与語チマコさんらと林晴子さんから長久手町地域婦人会が習って、その年の町の敬老会で披露した。これを手始めに、町内各子供会、上郷保育園母の会等で盛んに行われるようになり、国際児童年には愛知青少年公園で行われた記念行事に連合子供会が出演したりしたが、現在では俚謡研究会と一部の子供会だけで行われている。

長湫でも大正から昭和にかけて、このザイ踊りが行われ、舞いは寺島すみさん（西洞）、唄は川本たまさん（東洞）らが指導に尽力した。

「巡礼おつる」

歌詞 今夜こなたの庭^にかりて
師匠も取らずに恥ずかしや

オー恥ずかしや

一つとエーヤー

一人娘のおつるとて

柄杓においつる杖に笠

オー杖に笠

二つとエーヤー

ふだらく岸打つ三熊野の

那智山お山はほど高い

オーほど高い

三つとエーヤー

見るよりお弓は立ち上り

お盆に白がのころざし

オーころざし

四つとエーヤー

ようこそ西国しゃしゃんした

さだめし連衆は親御達

オー親御達

五つとエーヤー

いえいえ私は一人旅

父さん母さん顔知らず

オー顔知らず

六つとエーヤー

無理にすすめたわらじ銭

少々ばかりのころざし

オーころざし

七つとエーヤー

泣いて別れた娘の子

抱き上げて見上げて我が子かと

オー我が子かと

八つとエーヤー

屋敷を出る時ばば様が

母親お弓とゆうじゃぞと

オーゆうじゃぞと

九つとエーヤー

これ程こいしい両親は

いつくの果てまでたずねても

オーたずねても

十とエーヤー

徳島城下の十郎兵衛は

我が子をころして金をとる

オー金をとる

十一とエーヤー

一日あゆんでくたびれた

ここで泊ろうか陽は高い

オー陽は高い

十二とエーヤー

西を向いては手をあわせ

東を向いても手をあわせ

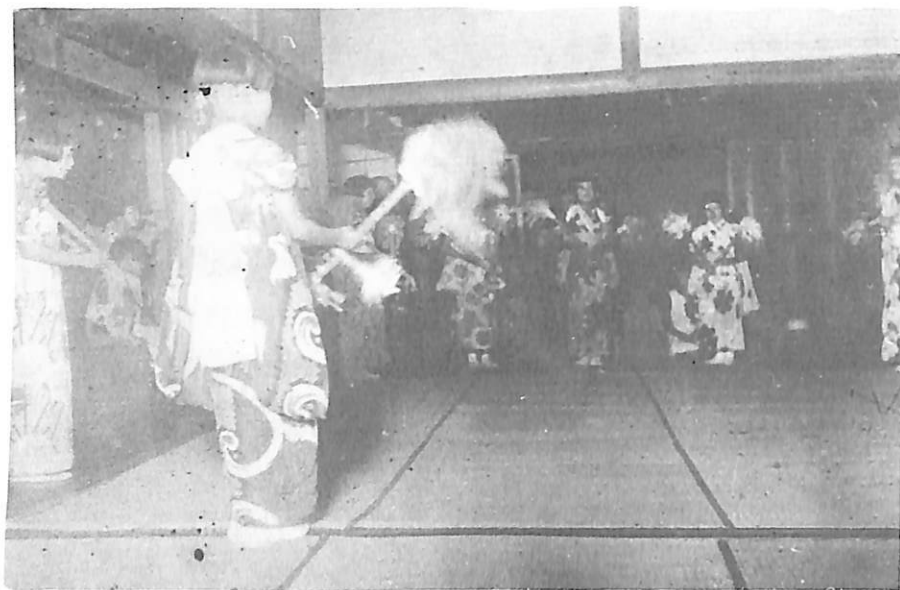
オー手をあわせ

十三とエーヤー

三千世界をたづねても

親ほどこいしいものはなし

オーものはなし



北熊の子供たちによるザイ踊り

=昭和15、6年ごろ=

柴田弘子さん(北熊)所有

「花づくし」

(林 晴子さん所蔵)

一つとエーヤー

一重に咲いたる白椿

折るなよ取るなよ見事なに

オー見事なに

二つとエーヤー

双つ蝶々がはたらいて

菜種の花見て声を出す (恋をする)

オー声を出す (オー恋をする)

三つとエーヤー

見事に咲いたる藤の花

松にのぼりてたゆたゆと

オーたゆたゆと

四つとエーヤー

夜昼咲いてるゆうごはな

夜明にしおれる哀しさや

オー哀しさや

五つとエーヤー

いつも通る道端で

菜種やレンゲの花を摘む

オー花を摘む

六つとエーヤー

むごいやかわいやあやういや

井戸場に咲いたる雪の花

オー雪の花

七つとエーヤー

何もゆうなよ話すなよ (語るなよ)

人が尊めるほけの花

オーほけの花

八つとエーヤー

山咲育ちのわれわれは (山吹育ちの)

花は咲いても実はならぬ

オー実はならぬ

九つとエーヤー

ここのお庭に咲く花は

牡丹に芍薬百合の花

オー百合の花

十とエーヤー

当家の座敷に咲く花は

うどんげの花にてこえを出す(花見て恋をする)

オーこえを出す (オー恋をする)

十一とエーヤー

糸屋の娘が糸を取る

茄子の花の咲くまでも

オー咲くまでも

十二とエーヤー

俄にこがれてしばられて

売られて行くのが菊の花

オー菊の花

歌詞の右横のカッコ内の歌詞は、与語ハナさんの記憶によるもの。

「佐倉宗五郎」

(林 晴子さん所蔵)

一つとエーヤー

一つ下総佐倉庄の

岩橋村にかくれなし

オーかくれなし

二つとエーヤー

深いたくみの宗五郎は

したじた百姓救わんと

オー救わんと

三つとエーヤー

身は白洲で死ぬるとも

二百五十と四ヶ村の

オー四ヶ村の

四つとエーヤー

夜屋ともない宗五郎は
願書したためねがい
オー願いでる

五つとエーヤー

いかに代官憎いとも
お上の威勢でまならぬ
オーまならぬ

六つとエーヤー

無理と思はばおかしゃんせ
二人の子供が迷います
オー迷います

七つとエーヤー

何なく我が家を立ち退いて
因幡の渡しを行き抜ける
オー行き抜ける

八つとエーヤー

やれもう・・・・・・（不明）
三枚橋に身をかくす
オー身をかくす

九つとエーヤー

これより御老女のごいしさま
年具まかりと願ひ出る



オー願ひ出る

十とエーヤー

とんと殿様お聞きずみ
年具まけたと下りくる
オー下りくる

十一とエーヤー

勇んで宗五郎帰るみち
お上の捕手に召しとられ
オー召しとられ

十二とエーヤー

にわかに女房や子供まで
下総城下に呼び出され
オー呼び出され

十三とエーヤー

さても宗五郎召しだされ
水ぜめ火ぜめのごうもんに
オーごうもんに

十四とエーヤー

知らない子供を突き殺す
宗五郎夫婦は血の涙
オー血の涙

十五とエーヤー

五日^{ゴニチ}もたたないそのうちに

家内五人をせめ殺す

オーせめ殺す

十六とエーヤー

六^{ロツド}途に迷うそのうちに

天下の御殿にあらわれて

オーあらわれて

十七とエーヤー

ひびに殿様気がちがい

宗五郎夫婦の念力で

オー念力で

十八とエーヤー

早く下総御注進

奉行聞くより御切腹

オー御切腹

十九とエーヤー

国は年具がまかり来て

二百五十と四ヶ村は皆・・・（不明）

オー四ヶ村は

二十とエーヤー

にわかに社をきづかれて

宗五郎大明神と祝い込む

オー祝い込む

大草三光院の絵馬

絵馬は、武人が社寺に祈願したり、戦勝報告のために、馬や木馬を奉納していたものを、その馬や木馬の代りに、馬の板絵を奉納したのがはじまりといわれている。

江戸時代には、家内安全、商売繁盛などさまざまな祈願をして社寺に絵馬の奉納することが、庶民の間にも盛んに行われるようになり。絵馬屋（絵馬を描く専門の職人）や小型の絵馬を売る店ができ、市中を売り歩く人までできてた。一方社寺には奉納された絵馬を納める、絵馬堂が建てられるほど盛んになった。

大草の三光院は観世音菩薩を祀る由緒あるお寺で、開山は約600年前、室町時代の終わりごろと聞いているが、その三光院の本堂に、6枚の絵馬が保存されている。

○大草馬の塔	天和元年（1681年）	奉納
○馬 図	天保2年（1832年）	奉納
○牛若弁慶図	天保3年（1832年）	奉納
○墓参図	万延元年（1860年）	奉納
○芝居図	明治17年（1884年）	奉納
○馬 図	明治27年（1894年）	奉納

この6枚の絵馬は、それぞれの時代を物語る貴重なものであるが、特に江戸時代4枚の絵馬に注目した。わたしが絵かきであるので、その目は自然に美術的な面に向き、資料としての歴史的な考察とは違うとも知れない。

大草馬の塔の絵馬は、美術的に優れたもので、大草の祭りの馬の塔が、美しく躍動的に描かれている。馬の勢い、馬ひく人々、その綱にとまる人々の表情、動

きなど巧みな筆で表現されている。また馬の塔の飾りも、デリケートな筆致であり、全体の色彩も美しい。作者は不明であるが、なかなかの絵師の手になったものと思われる。奉納の天和元年といえは、徳川幕府五代将軍綱吉の時代で、江戸の初期にあたり、おそらく現存する絵馬の中でも貴重なもののように思える。

牛若弁慶図は、前述の絵馬より約150年後、天保3年奉納とある。この年は天保大さきんのはじまりの年でもあり、ようやく大平の続いた江戸幕府の政治にも、さまざまな影りが起こりはじめた時代である。江戸から遠くはなれた寒村の大草に、その時代の波がどう伝わっていたかは知る由もないが。この1枚の武者絵の絵馬は、そういう時代の信者のひとりが、何かの祈願をこめて奉納したものと思われ、その風雪を感じさせられるものである。一方、美術的に見ると、武者の鎧の色彩や背影の松の表現など、様式化した装飾的な美しさに惹かれる。この年の1年後、安藤広重の「東海道五十三次」が出版された年であることを思うと、世の中は浮世絵のブームの時代である。この武者絵の作者は不明であるが、絵の中に、浮世絵の影響を見るのは手前流の偏見だろうか。

墓参図の絵馬は、武者絵とあまり変わらない時代のものであるが、ひとりの男が手桶を持った墓参の図で、ものさびしい絵である。幕末動乱の時代か或は奉納者の祈願の故なのか、絵馬にはめずらしい絵でもある。ちなみにこの絵馬には作者、孤松斎惟玉筆とある。

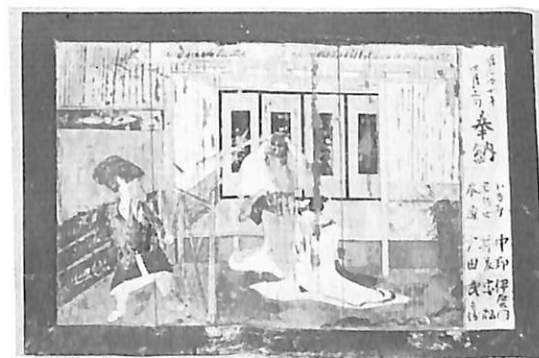
天保と明治の2枚の馬の図は、馬頭観音の由緒から奉納されたものと思われるが、2枚とも美しい図柄で、美術的にも優れたものである。もう1枚の村芝居の図は、当時の村芝居の雰囲気や伝わるような絵で興味あるものである。

これは余談であるが、わたしが20年来美術の旅をつづけているメキシコにも、この絵馬によく似た絵が古来から存在している。

ウィチョール族というメキシコの奥地の山岳地帯に住むインディオが、豊穣を神に祈願して作る板絵や、メキシコ全土に伝わる教会の祭壇や、各家庭の祭壇を飾る、ブリキ板に描かれた宗教画(キリスト聖書の物語の絵)は、神への祈願や感謝した人々の信仰の中から生まれる美術品である。

洋の東西をとわず、人の心の中から生まれるものの違いはないものだと、つくづく感じられるものである。

大草馬の塔の絵馬は、町の文化財の指定を受けているが、その他の絵馬もそれに劣らない、貴重なものと思われる。



三光院の村芝居の図 絵馬

村芝居の図 絵馬 (高50cm×巾60cm)
銘文 明治拾七年四月上旬 奉納
小 三ノ 蔵
蔵 戸田 武兵衛
井藤 宗松
中野 伊左エ門

お わ り に

今年も豊作のようだ、こい緑の稲田の面を風が通りすぎてゆく、鎮守の森も深く影をおとして、残暑は今尚、厳しい、待望の「長久手の芸能」が、長久手の方言につづいて今ここに発刊されて本当にうれしく思います。

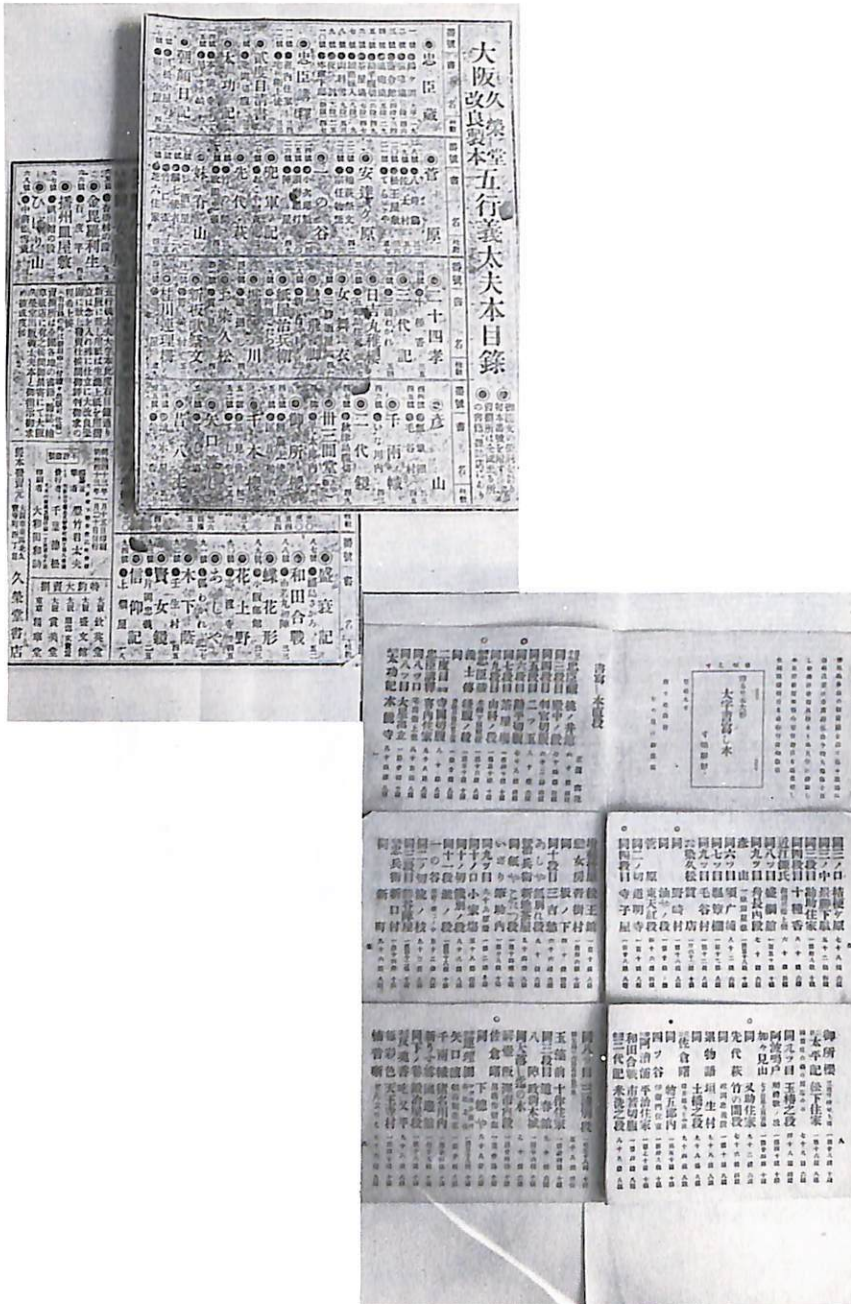
長久手を代表する、棒の手と共に古く江戸時代中期に発祥した、神楽、打囃し太鼓、獅子舞、万歳及村芝居等は往時より戦争前まで、ながく郷土の伝承芸能として社寺に奉納し、村人の慰安娯楽として村内の多くの地で、上演し興行されたものであるが、今はその一部を残してながい戦争期間の中で消滅した。思えば残念なことである。ここに、長久手町郷土史研究会第二石崎部会8名は、当時を想起し調査には困難を極めさせて詳細は、わからないまでも上演者の氏名だけでも留意して調査に当り、その熱意と御労苦に対し厚く感謝し、御礼申し上げます。

また編集委員は今だ未熟なものばかりで、誤りも多くございますが、機を得て後日改訂をしますので皆様の御叱声、御指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和60年8月31日

長久手町郷土史研究会

会長 福 岡 錦 三



長久手町郷土史研究会会員名簿

青	山	清	治
浅	井	金	徳
浅	井	鹿	雄
浅	井	千	子
石	崎	鶴	広
伊	藤	義	雄
尾	裕	高	義
加	藤	和	江
加	藤	明	子
川	本	正	時
川	本	春	一
小	林	勝	美
近	藤	良	元
坂	谷	幸	昭
寺	島	初	茂
寺	島	十	一
中	野	四	美
日	比	義	夫
福	野	鯨	信
水	岡	秋	三
山	野	鶴	金
与	本	藤	善
	語		宝
			一

発行年月日 昭和 60 年 9 月 15 日
 発行 長久手町郷土史研究会
 (愛知郡長久手町大字岩作字城の内 60 の 1)
 印刷 東海印刷株式会社

長久手町中央図書館



00473152

